埼玉大学紀要　教育学部，62(1):191-201（2013）

中学校英語検定教科書における文法・語彙項目の導入時の問題点

―疑問詞 what、不定詞の名詞用法、未来表現―

及川賢　　埼玉大学教育学部英語教育講座

キーワード:中学校、英語、検定教科書、配列、順序

１．はじめに

中学校における英語指導では検定教科書が主たる教材となっているが、教科書内の文法項目や語彙項目の導入順序や導入に使われる素材について具体的に論じられることは少ない。本論では、重要文法・語彙項目のうち、疑問詞what、不定詞の名詞用法、未来表現の3つを取り上げ、その問題点を検証しながら、改善策を提案する。

２．背景及び目的

中学校英語検定教科書における文法項目の配列を論じたものに馬場（2009）がある。馬場は当時使用されていた平成18年版中学校英語検定教科書（全6種）の現状に基づき、一般動詞とbe動詞の提示順序、過去時制と未来表現の導入時期、受動態と現在完了形の導入時期、現在完了形3用法の導入順序、関係節と接触節の提示順序の5つについて、それぞれの問題点を指摘し、改善案を提示している。

神本（1997）は大学で使用されている「やり直し英文法」と呼ばれる種類の教材の文法配列を検討するため、大学生98名を対象に学生の自己能力評価アンケートと学生の英文法能力理解度テストを実施した。自己能力評価アンケートの結果、難しいと感じている項目は、関係副詞、仮定法過去完了、分詞構文、前置詞、現在分詞で、易しいと感じている項目は、現在進行形、受動態、過去進行形、助動詞、比較、であることが分かった。また理解度テストの結果を正解率の低かった順に並べると、過去分詞、分詞構文、動名詞、現在分詞、関係副詞、現在完了、過去進行形、仮定法過去、過去完了、仮定法過去完了、関係代名詞、接続詞・不定詞（同順位）、受動態・助動詞（同順位）、話法・現在進行形（同順位）、未来進行形・前置詞（同順位）、比較、となった。また、自分ではできると思っているのに実際にはできていない文法項目として、動名詞、現在完了、過去進行形、過去分詞、現在進行形、過去完了、不定詞、現在分詞、助動詞（アンケートと理解度テストの順位の差が大きい順）、理解度テストで順位そのものが低い文法項目として、過去分詞、動名詞、分詞構文、関係副詞、現在分詞、現在完了、仮定法過去、過去完了、仮定法過去完了、不定詞（正解率が低い順）となる。神本は理解度が低い項目の原因として、１）英語の言語形式が同じでその用法が何通りかある場合（-ing形や過去分詞）と、２）文法項目の基本的言語形式は規則的であってもその項目に用法が何種類かある場合（完了形や仮定法）を挙げている。また、神本（1998）はこの調査をもとに-ing形と-ed形を中心にさらに調査を行っているが、いずれも配列に関する実証研究として貴重である。

しかし、中学校検定教科書の導入順序等に関する研究は概してその数が少ない。その原因は、

文法・語彙項目の導入順序等を決定するのは教科書の編集に携わるものに限られており、その是非を論じても、それが反映されるかどうかわからないという現実があり、導入順序等については受け身的にならざるを得ないのが現状である。そのため、導入順序等に対する興味・関心が研究に結びつくことは少ないのでないだろうか。

また、馬場（2009）の以下の指摘も指導順序等に関する研究の少なさの原因として有力である。

１）　現在の言語材料配列について、教科書の使用者である教員の多くが、「それなりに良いもの」と捉えている可能性がある。

２）　1958 年度版から 1977 年度版まで続いた言語材料の学年指定がいまだに英語教科書作成者や英語教員の意識に根強く残っている。

３）　移行措置に対する配慮。言語材料の配列が他社と大きく異なると、教科書の新規採用に影響がでるため、大きく変えることは不利となる。

しかし、現在多くの教科書で採用されている導入順序や項目が経験則に基づいている以上、改善すべき問題が含まれている可能性は否定できないだろう。本論は「疑問詞what」「不定詞の名詞用法」「未来表現」の3項目を取り上げ、それぞれの問題点を指摘し、改善案を提案することを目的とする。

本論で取り上げる文部科学省検定済教科書（以下「教科書」）は以下の6種である。なお、特に断りがない場合、本論での「教科書」は英語の教科書を指す。また、「課」に相当する表現はLesson、Unit、Programの3つがあるが、本論では「課」で統一する。

COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE（東後勝明他著、光村図書出版）→Columbus
NEW CROWN ENGLISH SERIES（高橋貞雄他著、株式会社 三省堂）→Crown
NEW HORIZON English Course（笠島準一他著、東京書籍株式会社）→Horizon
ONE WORLD English Course（松本茂他著、教育出版株式会社）→World
SUNSHIE ENGLISH COURSE（松畑熙一他著、開隆堂出版株式会社）→Sunshine
TOTAL ENGLISH NEW EDITION（矢田裕士他著、学校図書株式会社）→Total
（ABC 順、矢印の右は本論中の略称）

３．文法・語彙項目の導入順序の検討

3-1 疑問詞 what

(1)現状と問題点

疑問詞whatは現在の中学校検定教科書では「代名詞」としての用法と「形容詞」としての用法が区別されている。代名詞として使用する場合、whatが単独で名詞句を構成する（例：What do you like?）が、形容詞の場合は直後に名詞が続く形になる（例：What sport do you like?）。

中学校で問題となるのが、後者の形容詞としての用法である。具体的には、以下のような英文を産出する学習者が多いという点である。

*What do you like sport?

正しい英文はWhat sport do you like?なので、sportをwhatから切り離している点が誤りである。この種の誤りは実は中学生のみでなく、高校生、大学生、社会人にも見られる。まったく通じないというレベルの誤りではないが、指導においては正すべき誤りである。

(2)原因

この種の誤りが発生する原因の一つが代名詞としてのwhatと形容詞としてのwhatの導入順序だと思われる。平成24年4月より使用されている教科書を確認すると、すべてが代名詞としての用法を先に導入し、しばらくしてから形容詞としてのwhatが導入されている（2つの用法間の時間的差異は教科書により異なる）。具体的には以下の通りである。

Columbus p. 33: What's this?
（p. 54: What do you think of Tina?）
p. 47: What kind of pet do you want?
Crown p. 27: What is this?
（p. 36: What do you have in your hand?）
p. 37: What music do you play?
Horizon p. 36: What's this?
（p. 41: What do you have for breakfast?）
p. 62: What time is it in Tokyo?
（参考）p. 65: Mei, what foreign language do you study?
World p. 28: What is this?
（p. 42: What do you have in your hand?）
p. 42: What subject do you like?
Sunshine p. 38: What do you study on Monday afternoon?
p. 108: What color do you want?
Total p. 27: What do you read?
p. 36: What sports do you like?

各教科書の巻末にある単語リストはwhatの用法として代名詞と形容詞の両者を掲載し、その初出ページも示している。その数字に従って検索した各用法の初出文が上記のリストである。ただし、HorizonのWhat time is it in Tokyo? (p. 62) は決まり文句（formulaic）としての意識が高いと思われるので、参考として、Mei, what foreign language do you study? (p. 65) も挙げた。また、形容詞whatはHorizonのWhat timeの例を除き、すべて一般動詞とともに使用されているので（Horizonもその直後に一般動詞を使用した文が使われている）、代名詞whatの初出がbe動詞による場合は、一般動詞による初出文も併せてリストに加えてある。

このリストから、各社とも代名詞としてのwhatが先に導入されていることが確認できる。ただし、各社ごとにその導入の時期や項目には違いがある。Crown及びWorldは代名詞whatのほうが先に導入されているものの、be動詞とともに使用されている形であり、一般動詞を使った代名詞whatの文は形容詞whatとほぼ同時期に導入されている。Columbusも同様に代名詞whatのほうが先に導入されているものの、こちらもbe動詞とともに使用されている形であり、しかも、一般動詞を使

った代名詞whatの文は形容詞whatよりも後に出てくる。HorizonとTotalは代名詞whatが先に導入され、10〜20ページを置いて形容詞whatが導入される。Sunshineがその間隔が最も大きく、70ページの開きがある。

(3)提案

この２つの用法の導入順序として、筆者は現状と逆の順序を提案する。すなわち、形容詞としての用法（例：What sport do you like?）を先に導入し、一定期間の後に代名詞としての用法（例：What do you like?）を導入するというものである。この順序の変更には以下の2つの利点が考えられる。

①非文の回避

上述の通り、英語学習者の中には*What do you like sport?という非文を産出する学習者が少なからず存在する。この原因は、生徒の多くが先に導入された代名詞whatの文を分析的に捉えることなく、what do you〜?という「かたまり」として覚えるためだ、と推測できる。特に英語学習の初期段階であれば、口頭作業などを通じて、これらの文を何度も繰り返し練習する可能性が高い。そのため、whatの後ろにsportなどの名詞（句）を挿入する作業は多く学習者にとって困難となり、What do you like?というかたまりを分解できず、行き場を失ったsportがそのかたまりの後ろに置かれることとなる。

形容詞whatを先に導入する場合でも、学習者はまずこれらの表現をかたまりで覚える可能性が高い。その意味では、現在の教科書の導入順序と同じ困難点が考えられるが、形容詞whatの導入を先に行う場合、whatと後続の名詞（句）を切り離す練習が取られる可能性がある。例えば、What sport do you like? であれば、sportを他の名詞に入れ替える練習を行う可能性が高い。sportをfood、subject、colorなどに入れ替えるパターン・プラクティスやそれらの英文を実際に使ってのコミュニケーション活動などを通して、学習者はwhatとそれに続く名詞が常にひとつのかたまりではないことを意識的あるいは無意識的に学ぶのではないだろうか。

もちろん、多くの学習者が形容詞whatの文に多量に触れることで誤りを回避できる可能性はある。What time do you get up? という時間を尋ねる表現で *What do you get up time? という誤りはほとんど見られないのは、What time〜? の表現に触れる機会が多いためだと思われる。しかし、限られた授業時間内では触れることができる英語の量や練習量に限界があるため、導入順序の工夫などで誤りを少しでも回避することを求めるべきであろう。

②導入場面の自然さ

入門期の場合、代名詞whatよりも形容詞whatのほうが自然な場面を作り出せる可能性が高い。例として、What do you like?とWhat sport do you like?で比較してみよう。What sport do you like? で始まる対話文はその1文で話題がスポーツであることがわかる。一方、What do you like?で始まる対話文は、それ1文では話題が不明確である。その文の前に何が話題になっているかを示す説明などが必要となる。例えば、”I like sports. I like tennis. What do you like?” のように、少なくとも１〜2文を挿入する必要がある。

しかし、教科書で1ページに盛り込むことができる英文の量には限りがある。筆者は中学校英語の検定教科書（Total）の編集に携わっているが、入門期の対話教材はある程度短いものにする必要があり、使用する英文は厳選する必要がある。これまでも何度かWhat do you like? タイプよりも What sport do you like? タイプの方が自然だという場面に出会っている。

③形容詞 what は小学校ですでに触れている

平成23年4月から小学校5、6年生は外国語活動が必修となっている。「外国語」となっているものの、現行の小学校学習指導要領（平成20年3月告示）に「英語を取り扱うことを原則とする」（第4章　外国語活動　第3　指導計画の作成と内容の取扱い　１（１））とあるように、英語が対象となっている。外国語活動は「教科」ではないため教科用図書（教科書）は存在しないが、文部科学省が発行した*Hi, friends! 1*及び*Hi, friends! 2*を採用している小学校が非常に多い。その*Hi, friends! 1*のLesson 5にWhat do you like?とともにWhat animal/color/fruit/sport do you like?が使われている。また筆者は小学校の外国語活動を参観させていただく機会が多いが、「What+名詞」を使った活動は何度も目にしている。小学校の外国語活動は英語の習得や定着が目的ではないので、中学校入学時点でこれらの表現が身に付いているということにはならないが、これらを使った表現に小学生の多くが触れているという事実を考えれば、中学校で形容詞whatを先に導入しても生徒の混乱を招く恐れは小さいと見ていいだろう。

以上の 3 点から、中学校では代名詞 what よりも形容詞 what の方を先に導入し、生徒がある程度習熟してから代名詞 what を導入するほうが適切だと考えらえる。現時点では、全種が代名詞 what から導入しているが、一般動詞だけで見た場合、すでに形容詞 what から導入している例も見られるので、混乱は少ないと見てよいだろう。さらに、この 2 つの用法の順序を変えた導入方法で実際に導入を行い、その効果を客観的に検証する必要もあるだろう。

3-2 不定詞の名詞用法の導入

(1)問題点

不定詞の用法は伝統的に「名詞用法」「形容詞用法」「副詞用法」の3つに分類されており、Crownを除くすべての教科書がこれらを別のセクションで導入している（Crownは副詞用法と形容詞用法を同じページで導入）。導入の順序は教科書ごとに異なり、平成24年版の場合以下の2種類が存在する。Horizonのみが名詞用法と副詞用法の順序が他社と逆になっている。

名詞用法→副詞用法→形容詞用法：Columbus、Crown、World、Sunshine、Total
副詞用法→名詞用法→形容詞用法：Horizon

問題として考えらえるのが、名詞用法のほとんどがwantと伴に導入されている点である（例：I want to use English in my future job.（Horizon））。より具体的には、wantを使った不定詞は「want to～＝～したい」として指導されることが多いと思われる点である。不定詞の名詞用法であることを意識した日本語訳にすれば、「～することが欲しい」や「～することを欲する」になるはずだが、どちらも日本語として不自然、あるいは古めかしい表現であるため、より自然な日本語である「～したい」と訳されるのであろう。

各社の巻末の単語リストのwantの項を確認すると、want to～を連語として提示しているところが6種中4種ある。

Columbus want to～　～したい

Crown　（～することを）望む、～したい（to～はwantの目的語）
Horizon　【want toでの説明はない】
World　〔want to～で〕～したい
Sunshine　【want toでの説明はない】
Total　want to～　～したい

また、小学校の外国語活動で使用されることが多い文部科学省の『英語ノート２』や*Hi, friends! 2*でもそれぞれの最後に将来の夢を語る課が用意されており、want to～が使われている。

このため、多くの学習者が「want＋ 不定詞の名詞用法」ではなく「want to＋動詞の原形」と捉えている可能性は否定できない。特に、上で述べたように、不定詞は名詞用法から入る教科書がほとんどであることを鑑みると、不定詞は「to＋動詞の原形」という形式を習得すべき時期に、その構造が捉えにくいwantによる名詞用法は避けるべきではないだろうか。

(2)現状

各教科書（平成24年度版）の現状を確認してみよう。取り上げたのは各教科書が不定詞の名詞用法の導入ページで使用している英文である。いわゆる目標文として提示されている英文と本文中で実際に使われている英文が異なる場合もあるので、教科書ごとに両者を列挙する。

Columbus　目標文：I wanted to play the *sanshin*.
　本文：　I wanted to play the *sanshin* myself.
Crown　目標文：Amy wants to read the book.
　本文：I want to go to a farm.
　I want to work in a department store.
Horizon　目標文：I want to use English in my future job.
　本文：I want to use English in my future job.
　Oh, what do you want to be?
　I want to be a computer programmer in the United States.
　I'm not sure, but I want to work in Japan.
World　目標文：I want to show you around Asakusa.
　本文：I want to show you around Asakusa.
Sunshine　目標文：I want to be a doctor.
　Do you want to help sick people?
　本文：Do you like to play with children?
　I want to be a nursery school teacher in the future.
　I would like to take care of children.
Total　目標文：I like to use computers.
　本文：So I want to go to a pastry shop for career experience.
　I need to think about it.

このリストからもわかるようにTotal以外のすべてが目標文にwantを使っている。本文でも4種

（Columbus、Crown、Horizon、World）がwantのみの文を提示している。want以外の動詞等を使用している教科書が2種あり、Sunshineはlikeとwould likeを、目標文でlikeを使っているTotalはwantのほかにneedを使っている。

全体的に見て、やはり名詞用法はwantを使って導入されている場合が多いと言えるだろう。

(3)提案

不定詞の名詞用法の導入時にはwantを使用しないことを提案する。理由はこれまでに述べたとおり、不定詞の構造理解上好ましくないからである。

具体的な代案として以下の2つが考えられる。

①want以外の動詞を使う

既にTotalが目標文として、またSunshineが本文でlikeを使っている。また、Totalは本文にneedも使用している。これらはwantに比べ、「動詞+不定詞」の形が捉えやすい。例えば「like＋不定詞」は「like＝好きだ」「不定詞＝～すること」として英語を日本語にそのまま置き換えても「～することが好きだ」という自然な日本語になる（needも同様に「～することが必要だ」）。

ただし、「like＋不定詞」には注意を要する。likeは目的語としてing形と不定詞の両者を取ることができるが、この2つは意味上の違いがあることが指摘されている。江川（1991、p. 369）は以下のように述べている。

> 平生の好き嫌いを表すには動名詞のほうが好まれるのは、動名詞はすでに経験済みの事柄または現在経験中の事柄を表すからである（中略）。これに対して不定詞は未来において経験する可能性のある事柄を表す（後略）

例えば、I like playing tennis.はテニスという競技に対して（少なくともその時点で）恒常的に好意を抱いているのに対し、I like to play tennis.はこれから先にテニスをしたいという希望を表すことがある。その意味では、このlike toはwant toに近い。江川が指摘の「好まれる」という表現が使われているように、この区別が常に適応されるわけではないが、使用にあたっては注意が必要だろう。

be動詞を主動詞として使うことも考えられる。例えば、以下の英文であれば、to以下を「～すること」と捉えやすい。

My job is to teach English to high school students.（私の仕事は高校生に英語を教えることです。）

あるいは、不定詞句を主語とすることも可能である。

To teach English to high school students is my job.（高校生に英語を教えることが私の仕事です。）

また、Totalで使われているneedも有用である。

I need to think about it.（私はそれについて考えることが必要だ。）

②「want to～」を連語として扱わない

ここまで、教科書や学校現場で「want to～」 を連語とし、「～したい」という日本語訳を当てはめているという前提に論を進めてきたが、「want to～」を連語とすることそのものを排除するという案も考えられる。

実際に、HorizonとSunshineはwant to～を連語として捉えていないことが本章の「(1)問題点」で明らかになっている。また、Crownもwantに「～したい」という日本語訳を与えているものの、「（to～はwantの目的語）」という注釈を加え、wantと不定詞を切り離そうという試みが見られる。

不定詞の名詞用法の導入にwantを使用することの問題点を挙げてきたが、現状ではほとんどの教科書がwantのみを使用しており、大きな偏りが見られる。今後の改善が必要であろう。

3-3 未来表現

未来表現の導入に関しては次の2点を考える必要がある。

○過去形と未来表現のどちらを先に導入すべきか
○未来表現の導入にはwillとbe going toのどちらを用いるべきか

英語で未来を表す表現はwill、be going toのほかにshallやbe –ing、現在形を使った表現、be about toなどが考えらえるが、本論では中学校で扱うwillとbe going toに絞って検討する。また、「未来」に関する文法用語に「未来形」があり、平成18年度版ではSunshineが使用していた。しかし、英語に「未来形」があるかどうかは議論の分かれるところであり（中原、2008、p.363）、また、現行版ではすべての教科書から「未来形」が消えたため、本論では「未来表現」を用いる。

(1)過去形と未来表現のどちらを先に導入すべきか

現行版の教科書は、すべて過去形が1年生で導入され、未来表現は2年生となっている。過去形の導入時期を見るとすべて最後の課になっている（最後の１課を使っている教科書と最後の２課を連続で使っている教科書がある）。一方、未来表現はすべて2年生の早い時期に導入されている。すなわち、すべての教科書で、過去形の方が未来表現より先に導入されている。

過去形の学習における困難点として考えられるのが、不規則動詞の存在である。不規則動詞の数は動詞全体でみれば決して多くはないが、英語の場合、基本的な語彙の中に不規則なものが多く、早い段階で例外の学習を迫られる。これが原因で英語に苦手意識を持つ、あるいは増す学習者も少なくないだろう。

各教科書の過去形の導入に関する現状を確認しよう。

Columbus 第10課（規則動詞のみ）：visited, phoned, enjoyed, missed,
第11課（不規則動詞が加わる）：ate, went, had, saw, took, thought,
Crown 第9課（規則動詞と不規則動詞）：played, visited, enjoyed, talked, went, ate, had, made, swam, bought, saw, fell, explained, came, ran, said, clapped, asked, learned,
Horizon 第11課（規則動詞と不規則動詞）：walked, enjoyed, played, watched, used, wanted, tried, studied, went, got, saw, called, had, came, cooked, stayed,

World　第9課（規則動詞のみ）：talked, played, lived, studied, arrived, visited, watched, stayed, pitched, used, dreamed, listened,
第10課（不規則動詞が加わる）：came, took, went, ate, saw, got, was, were, had, met, taught

Sunshine 第10課（規則動詞のみ）：visited, lived, arrived, looked, learned enjoyed, missed
第11課（不規則動詞が加わる）：had、saw, went, stood,

Total　第9課（規則動詞と不規則動詞）：played, arrived, walked, visited, listened, cleaned, went, saw

Columbus、World、Sunshineは規則動詞先に導入し、課を改めて不規則動詞を導入している。Crown、Horizon、Totalは同じ課で規則動詞と不規則動詞を導入しているが、セクションは改めている。平成18年度版ではSunshineとTotalが不規則変化動詞を2年生に配置していたが、今回の版では全教科書が1年次に不規則動詞が入るようになり、導入時の学習負担が増えたと言える。

未来表現の場合、特にwillを未来表現の導入で使用する場合、基本的には動詞の前に挿入するというルールのみであり、主語や後続の動詞による活用等はないので、過去形よりも入りやすいだろう。また、すべての教科書で1年次に助動詞canを導入しているので、疑問文や否定文への変換も初めてのケースではなくなる。今後はこの2つの導入順序についてさらなる検討が必要である。

(2)未来表現の導入としてwillとbe going toのどちらを用いるべきか

現行版では、willを先に導入している教科書が2種（Crown、Total）、be going toを先に導入している教科書が4種（Columbus、Horizon、World、Sunshine）である。それぞれの利点及び欠点を検討してみよう。

①be going toを先に導入する利点

○すべて既習単語である：be動詞（am, are, is）は未来表現の導入時点ですべて既習であるため、新たな単語の学習という負担がない。一方、willで導入を行うと、新しい単語（=will）の学習が必要となる。

○疑問文・否定文への変換がこれまでと変わらない：be動詞を使用するため、疑問文・否定文の作り方はすでに中学1年生の1学期に学習済みである。新たな規則を学習する必要がない。一方、willの疑問文及び否定文の操作は、基本的にはbe動詞と同じである。また、中学校1年生次に助動詞のcanを学習しているため、十分類推が働くと思われる。難点として考えられるのは、否定形のwon’t（=will not）が全く新しい形であり、will notからの類推が難しいと感じる学習者もいると思われる。また、主語がyouの場合の疑問文は依頼の意味を表す場合が多くなるので、機械的な練習が必要な場合、主語が三人称の単語などを使う必要がある。

② willを先に導入する利点

○他の項目との混同が少ない：be going toの場合、形が進行形（特に現在進行形）とよく似ているため、2つの混同が考えられる。一方willは同じ機能で類似する単語が他にないので、その種の混同はない。

○主語による使い分けがない：willは主語が三単現の場合でも形が変わることがない。一方、be going

toはbe動詞を主語に合わせて変える必要がある。be動詞の変化についてはすでに1年生次に学習済みであるが、習熟していない生徒が少なくないと考えられるので、未来表現という概念の導入と同時にbe動詞の変化にも注意を払わなければならないという困難がある。

willとbe going toの利点及び欠点を検討してきたが、これまでに論じてきた疑問詞whatや不定詞の名詞用法に比べ、明確な優劣はないので、本論でどちらか一方を先に導入すべきであろうという提案は避けるが、教科書編集者は導入順序を決定する上で上記の点を考慮に入れて決定すべきであろう。

４．おわりに

本論では中学校英語検定教科書に出現する重要文法・語彙項目の提示順序等について検討してきた。具体的には疑問詞what、不定詞の名詞用法、未来表現である。疑問詞whatは形容詞としての用法を先に導入するほうが、*What do you like sport?という種類の誤りを減らせる等の利点があることを指摘した。不定詞の名詞用法に関しては、wantを主動詞とする例文が多く使われていることの問題点を指摘し、want以外の動詞で導入することを提案した。未来表現については、おもにwillとbe going toそれぞれの利点・欠点を確認し、導入順序決定における留意点を列挙した。

本論は主に現在使用されている中学校英語検定教科書をデータとして使用し、論を展開してきたが、今後は実証的な検証が必要である。例えば、代名詞whatを先に導入する被験者グループと形容詞whatを先に導入する被験者グループでは、*What do you like sport?という種類の誤りの発生率に実際に有意差があるのかどうかを検証する必要がある。

謝辞

本論の着想にあたっては、東京学芸大学附属国際教育中等学校の雨宮真一先生と埼玉大学教育学部卒業生の川津佳之君からヒントをいただいた。記して感謝したい。

引用文献

江川泰一郎（1991）『英文解説　―改訂第三版―』金子書房
神本忠光（1997）「大学での『やり直し英文法』の授業における文法項目配列―予備調査―」『熊本学園大学　文学・言語学論集』第4巻 第1号、pp. 19-38
神本忠光（1998）「大学での『やり直し英文法』の授業における文法項目配列―-ing形と-ed形を中心に―」『熊本学園大学　文学・言語学論集』第5巻 第1号、pp. 93-111
中原道喜（2008）『新マスター英文法』（聖文新社）
馬場哲生（2009）「中学校英語検定教科書における文法項目の配列順序　―問題の所在と今後の課題―」『東京学芸大学紀要　人文社会学系Ⅰ』60、pp. 209-220

(2012年 11月 12日提出)
(2013年　1月 11日受理)

Issues Involved in Introduction of Grammatical or Lexical Items in EFL Textbooks in Japan

OIKAWA, Ken
Faculty of Education, Saitama University

Abstract

The purpose of the present research is to analyze and discuss issues involved in introduction of several grammatical and lexical items in the authorized textbooks of English for junior high school students. The focus is on the following three linguistic items; presentation order of interrogative pronoun *what* and interrogative adjective *what*, infinitives that function as nouns often follow a verb *want*, and presentation order of future expressions *will* and *be going to*.

Key Words: junior high school, English, authorized textbook, presentation order